

【ドウシ・テ】

13387
35800

道志 手帖

2013.7 創刊号

Contents



表紙写真

撮影：井口陽介

(2013.6.19)

6月19日、道志村に牛がやってきました。南アルプス市からやってきた2頭のジャージー牛です。

What's "Doshi-techo"?

「道志手帖」とは？

略して「ドウシテ」。「どうしてどんなところ？」という関心から生まれた、道志村地域おこし協力隊による冊子です。村の外からきた隊員が、村で生活していて気になったこと、おもしろいなおもったこと、発見や驚きを、年4回報告していきます。隊員の活動報告もあわせておこないます。

道志村地域おこし協力隊のホームページから本誌を見ることができます。ぜひご覧ください。

道志村地域おこし協力隊ホームページ：doshi-okoshi.jimdo.com



〔特集〕 道志村地域おこし協力隊

1998年、9月某日。僕はバイカルにいた。 大野航輔…6

道志村に来て3か月。

この3か月で私は大きな発見をしました。 中島拓哉…8

樹上に足下に、

白い花がこぼれるように咲いている。 香西恵…10

6月から協力隊のメンバーに加わりました

井口陽介 31歳既婚です。 井口陽介…12

協力隊だより①…14



撮影：香西恵 (2013.6.27)

📷 gallery

しょうゆの泡をすくう

大釜で煮立て、出てくる泡をすくいきったらしょうゆの完成です。このとき周囲には香ばしいしょうゆの香りがたちこめていました。昔は村のあちこちで嗅ぐことのできたこの香り。自然とお腹が鳴ってしまいました。(中島拓哉)

隊員プロフィール

なかじまたくや
中寫拓哉

育ったところ：山梨県韮崎市
年齢：23歳 住んでいるところ：西和出村
道志の好きなおところ：道志川の大うなぎ



こうざいけい
香西恵

育ったところ：神奈川県川崎市
年齢：22歳 住んでいるところ：大栗
道志の好きなおところ：ディープな脇道



おおのこうすけ
大野航輔

育ったところ：神奈川県横浜市緑区
年齢：35歳 住んでいるところ：西和出村
道志の好きなおところ：山と川と人



ちぢわたけし
千々輪岳史

8月からやってきます！



いぐちようすけ
井口陽介

育ったところ：神奈川県相模原市
年齢：31歳 住んでいるところ：板橋
道志の好きなおところ：みんな語尾に「ズラ」を付けるとこ



「特集」

道志村 地域おこし 協力隊

協力隊それぞれのこれまでを特集
します。
協力隊員ってどんな人？
どうして道志にやってきたの？
……
隊員がおもしろいおもいにこれまでの
自分を振り返りました。



What's
"Kyoryoku-tai"?

地域おこし協力隊とは？

「地域おこし協力隊」とは、総務省が2009年からおこなっている事業です。

豊かな自然や歴史、伝統や文化に恵まれた地域で生活し、地域の発展に貢献したいという都会の人たちのニーズを背景に、人口減少や高齢化が著しい地方に人材を積極的に派遣し、その定住・定着を図ろうとする制度です。



上：先輩達と一緒に／右：漕ぐ手を休めて休憩／下：スフパートルの子ども達と／右頁：バイカル湖の夕暮れ



1998年、9月某日。 僕はバイカルにいた。

——大野航輔

面積は約3000平方キロメートル。ロシア南方、モンゴル国境まで約200キロ。広大な森林に囲まれた平野に豊かな水を湛える、世界で最も深い湖。



得た体験や記憶は、今も瑞々しく自分の身体にしっかりと刻まれている。

川から地平線へ続く草原。紺碧の青空と緑のコントラスト。遊牧民の飲料水でもあるエギン川の透き通る水。美しい月夜にこだまする狼の遠吠え。体長30センチを超えるイトウの群れ。何百年も変わらぬ姿を保つ自然の中で、ただただ毎日、舟を漕ぎ、流れに身を預け、夜になれば河畔で焚き火をして食事を作り眠った。

ただ、原初を感じる自然よりも印象に残るのは、人だ。カヌーで下る僕たちをいち早く岸から見つけるのは、いつも遊牧民の子供達だった。彼らの大半は外国人を初めて見る。岸に降りると好奇心旺盛な子供達に囲まれ、じゃれ合いながら遊ぶ。

やがて彼らがゲル(家)に僕たちを案内してくれる。ゲルには民族衣装であるデールを身にまとった彼らの両親や祖父母がいる。ゲルには、世代が一つ屋根の下で暮らす。子供達は羊の毛皮で作った床敷の上で眠る。家電製品はラジオのみ。放牧する羊を子どもも大人も馬で追い、季節になるとゲルをたたみ、一家で次の放牧地へ移動する。

つたないモンゴル語で日本から来たことを話すと、笑顔で歓待してくれる。馬乳酒を僕たちが飲み干すと、主人が奥の木棚を静かに

日没が近い。雲間から夕日の光が水面を照らし、黄金色に輝いている。風はななく、やや肌寒くなってきた。自分の周囲には、広大な水面が水平線まで続いている。一瞬、海にいるかのような錯覚を覚える。

カヌーのパドルを漕ぐ手を休め、水の中へ浸す。心地よい冷たさを身体全体で噛み締める。仲間の先輩達に乗る船に近づき、握手をして、歓声をあげる。2ヶ月を費やしたカヌーによる遠征が今、終了した。

早稲田大学探検部の「モンゴル・ロシアカヌー漕破隊」は、モンゴル北西部にあるフグスブル湖を出発点とし、そこから流れ出るエギン川を下り、途中で接続するセレンゲ川の終着点であるバイカル湖まで約1500キロメートルをカヌーで下る遠征を行った。準備期間は下見と、モンゴル語の習得を含め、2年。隊員は日本人3名、現地で手配した通訳1名、総勢4名の編成だった。

湖と湖を繋ぐ川というユーラシア大陸特有の特徴を持つことと、過去に漕破した前例がないこと、そして、モンゴルには河川敷等、一切の人工物が無い「天然」の川が残されていることが、遠征を決めた理由だった。

僕は大学2年生、20歳だった。もう15年前の体験になる。しかし、モンゴル、ロシアで

開け、ゆっくりとアルヒ(ウオッカ)の瓶を取り出す。棚の上にはドライラマの写真が置いてある。町までは馬でもかなり遠いはずだ。貴重な酒を厭わず、空になるまで僕たちの器に注ぎ、旅人との一時を楽しむ。そして、私たちがカヌーに乗り込む際には、羊肉をたっぷり持たせてくれた。

遠征の最中、旅人をもてなす、素朴だが温かい心に何度も遭遇した。その度に、自分はこのもてなしを、いつか誰かに返したい、そう思った。



特集

特集



寒さを感じる11月。念願の収穫（学生時代、都留で借りていた畑にて）



味噌づくり。大釜で5時間大豆を煮る



道志村に来て3か月。
この3か月で私は大きな
発見をしました。

——中嶋拓哉

そ

れは道志村で以前盛んに行われていたという「しょうゆづくり」の魅力です。

「手づくりのしょうゆは市販のものを使用しなくなるほどおいしかった」「しょうゆしぼりの時期になると、村のあちこちからしょうゆの香りが漂っていた」「しょうゆづくりの際の泡漬けは絶品だった」など、道志村のしょうゆに関するお話は、私にとっても心が揺さぶられるものです。

さて、以上のように道志村のしょうゆづくりに興味がある私ですが、そもそもなぜしょうゆづくりを注目するに至ったのか、この機会に私の大学での4年間を踏まえてご紹介したいと思います。

そうだ！ 大豆をつくらう

都留文科大学に通っていた私は、1年生の秋、大学の講義をきっかけに、都留市や西桂町で栽培される「青ハタ大豆」の存在を知りました。同時に国内の大豆自給率は低いながらも、大豆は私たちの生活に欠かせないことを改めて感じました。

そこで、体験的に大豆の栽培や加工を行い、大豆の魅力を発信できるようにと「大豆生活」という学生有志の団体をつくりました。しか

した。

2012年の2月。都留市の奥さん方に教わりながら、味噌づくりをしました。種まきから始めた大豆が味噌になっていく工程は、とても新鮮でうれしいものでした。つくりあげた味噌の生地は春、夏の暑さを越え、陽気も涼しくなった11月、ついに食べられるようになりました。

味噌の味はこれまで食べた味噌のなかで一番といえるほどのおいしさでした。「一から自分たちでつくりあげた」という思いが味噌のおいしさにひと味を加えたのでしょうか。これを機に、市販の味噌は買うことがなくなりました。

2012年の夏も大豆栽培をしました。この年は「青ハタ大豆」を中心に栽培し、少しは要領をつかめたのか、再度100キロほどの収量を得ることができました。

このときから、「味噌だけでない身近な加工品、しょうゆを手づくりしてみたい」という思いが強くなってきました。しかし、都留市内ではしょうゆづくりについての有力な情報はなかなか得られませんでした。同時に私にとっては全くの未知であったしょうゆづくりへの興味はますます高まっていきました。そんな折、「道志村は昔からしょうゆをつ

し、当然ながら素人集団であるために、大豆の栽培方法はほとんど知りませんでした。

そのため、都留市の農家の方をお願いして、大豆栽培の基本的な作業を教えてくださいました。大学2年生、2010年の初夏のことでした。

失敗と教訓

初めてとなる大豆栽培は、てんやわんやの連続でした。真夏の暑さのなか、毎週のように旺盛な雑草と奮闘したのも今ではいい思い出です。

しかし、初年度の収穫はすずめの涙ほどのごく少ないものでした。大きな原因は、学生ということに甘え、管理や世話を怠ったことでした。自分たちの甘さを思い知った1年となりました。

2011年、大学3年生となり二度目の大豆栽培に取り組みました。前年の反省を活かし、より責任感を持って栽培に挑みました。結果、この年は努力が実ってか、100キロほどの収穫ができました。前年とは天と地ほどの収量にうれしさはひとしおでした。

このとき私たち学生有志は、いよいよ栽培した大豆を加工する段階を踏むことができました。

くっていた」という情報を聞きつけました。ところが、時期は大学での卒業論文の執筆や就職活動の真っ最中。そのため、しょうゆづくりへの関心に距離ができてしまいました……。

道志としょうゆのめぐり合わせ

時間は流れ、2013年の初め。ひよんなきっかけから現在の道志村地域おこし協力隊の募集を知りました。

その後道志村を訪れ、憧れていたしょうゆづくりについて伺いました。すると、確かに村のなかでしょうゆはつくられていたのだと確信することができました。このときはやっと念願叶う気持ちでした。

現在、道志村に来てしょうゆづくりとめぐり合えたことは、きつと何かのご縁だと感じています。また当初は趣味の一部としてしょうゆづくりに興味がありました。最近道志村のしょうゆづくりは大切な文化・宝物であると考えようになりました。

「おいしかった」と過去のものになりつつある道志村のしょうゆをもう一度つくりあげたい。それが今の私の想いです。未熟な私ですが、どうかご指導いただければ幸いです。

樹上に足下に、
白い花がこぼれるように
咲いている。

— 香西恵



久保の吊り橋

車

窓から見えるのは、林縁のニセアカシ
ア、ウツギのなかま、庭先のフランス
ギク。田畑にはヒメジョオンやシロツメクサ、
クレソン。山に入ればゲンノショウコ、ヤマ
ボウシ、ミズキ、ガマズミ、ホオノキ、トチ
ノキ、エゴノキ……。

5月から6月にかけて、甘い香りとともに
白い花があふれる季節がやってきます。

一枚の地図をつくりたい

道志村で初めて迎えるこの季節。私にとっ
て一番の「白い花ビューポイント」は、久保
の吊り橋でした。ちょうど、目の高さにホオ
ノキの大きな花がいくつもひらいているので
す。まちなかや林内では、見上げるばかり
で、なかなか正面から花を見ることは叶いま
せん。吊り橋へ行くたびに、私は幸運をかみ
しめてホオノキを心ゆくまで見ることででき
ました。

村の人は知っているに違いない、こうした
季節ごとの自然のみどころ情報が、一枚の地
図になっていたら。私はそれを持って日々散
歩に出かけたいです。知人にも案内できます。
そんな身の回りの関心をもとに、道志で活動
していききたいです。

どうして道志に？

私は人と自然の関わりに関心があります。
高校で林業についての授業を受講したのを
きっかけに、人が手を入れ続けることで森林
のさまざまな機能が保たれることを知り、そ
のような関係を維持し、森をうまく利用して
きた先人の知恵や技に関心を持ちました。

その後、樽をつくる職人さんにお話をうか
がう機会がありました。材に使うスギと竹の
特徴から、たるやさんになる経緯まで、たく
さんのお話を聞きました（*1）。樽づくり
とのかたの人生は分ちがたくむすびついて
いて、技をきっかけにお話を聞くことの面白
さを感じました。

昔の知恵や技を聞き取り記録することを
もつとしてみたいと思い、大学では「地域の
人と自然の交流」をテーマにした冊子（*2）
をつくる活動に関わりました。

このなかで、木に関わることはもちろん、
まわりの自然や地域に根付く昔からの信仰や
文化を知る機会を得ることができました。
自分の住む地域について知っていくと、
もつと知りたくなります。ひとつ知ること
にまたひとつ、地域への愛着が深まって行きま

す。都留での大学生活は、それに楽しさを見
いだした4年間でした。

まだまだ都留について知らないことはいっ
ぱいですが、今は道志のことを知っていきま
いと思っています。

道志でやりたいことのひとつが、この冊子
づくりです。私たち協力隊が、道志ってどん
なところ？ という各々の関心から村の文化
や自然を記録していきます。

村の人にとってはよく知っている内容ば
りかもしれませんが、身近にあるあたりまえ
のことに目を向け、記録に残す機会は、あま
り多くありません。冊子をそのひとつとして、
あらためて関心を寄せるきっかけにしてい
ただけたらと思います。

「どうして道志に？」と聞かれることがよ
くあります。不便なところへどうしてわざわざ
ざ？ けれども何か魅力があつてやつてく
る。その答えが見つかるような冊子をつくっ
ていききたいです。

*1 林野庁「第6回森の聞き書き甲子園」に参
加。 <http://www.foxfire-japan.com>
*2 都留文科大地域交流センター フィールド
ミュージアム部門機関誌『フィールド・ノート』の
こと。



畑を耕耘（6月18日）。大豆をまき、オクラやトウモロコシの苗を植える

6月から協力隊のメンバーに加わり ました井口陽介 31歳既婚です。 ——井口陽介



生

まれば神奈川県相模原市で22歳まで過ごしたのち、東京の阿佐ヶ谷に引っ越して9年間東京で企画営業の仕事をしながら働いてきました。

私は高校時代から農業や田舎暮らしに憧れ、将来は自然が溢れる場所で暮らしたいと考えていました。31歳になり、今後の生活に向けて田舎暮らしができるように準備をしている中で、道志村の地域おこし協力隊のメンバーの募集と出会い、縁あってメンバーに加わるようになりました。

道志村には幼いころに両親に連れられてキャンプや川遊びに来たことがあり、川や森など自然豊かなこの場所がとても好きでした。また、縁あって道志村出身の妻と出会ったこともあり、今回の協力隊メンバー募集を見つけた時に「これだっ！」と思い、早速応募したところ今回のメンバーに加わるようになりました。

これからの活動

地域おこし協力隊となってまだ1週間程度ですが、（これを書いているのが6月10日です。）道志村では川、森などの豊かな自然が残っているのです、この素敵な場所を多くの

に知ってもらい、道志村に住みたいと思う若者を呼び込むことを目指して活動していきたいと思っています。

また、呼び込んだ若者が働ける仕事、生活できる住まいも一緒にサポートできるように協力隊として取り組んでまいります。

また、自分自身も協力隊の活動を通して、仕事を創り、住居を確保し、家族で道志村にずっと住み続けられるよう活動していきたいと思っています。

さらには、村民の方々の困りのことを少しでも解決できるように皆さんの困っていることの話聞かせていただき、解決に向けて新しい取組みにチャレンジしていきたいと思っています。

具体的には今年には既に他の協力隊メンバーと一緒に大豆などの野菜を栽培し道志村の特産品を新たに開発していきたいと考えています。また、今は少しずつではありますが、みなさんのお悩み事をお聞きして、自分がサポートできる事を考えています。

新しい環境の中で不慣れな部分もありますが、お声かけしますので、みなさんの話を聞かせてください。どうぞよろしくお願いします。

協力隊だより ①

このページでは、地域おこし協力隊の活動を報告していきます。



= 森のこと



= 大豆のこと



= 畑のこと



= 注目していること

薪ボイラー導入から1年

道志の湯に薪ボイラーが導入され1年が経過します。みなさんは、道志の湯のお湯が主に薪で温められていることを、既にご存知ですよね。それでは、道志の湯と同様の二次燃焼タイプの薪ボイラーが使われている温泉が国内にあと何ヶ所あるか、ご存知でしょうか？多いのか、少ないのか、どちらでしょう？ 答えは3ヶ所。山梨県早川町「ヴィラ雨畑」、高知県仁淀川町「土佐和紙工芸村」東京都檜原村「数馬の湯」。道志の湯を入れても、たった4ヶ所。まだまだ少ないと言えます。

さらに、燃料となる薪をNPOや間伐ボランティア、村民、事業者、役場など様々な方々が協力して木の駅に供給しているのは、道志村独自の取り組みです。そうすると、国内でも貴重な事例と言えると思います。

4月から6月の間に、東京はもちろん、北海道、長野県、山形県等から行政の方々やコンサルタント、NPO職員、大学教授などの方々が、視察見学に来て頂いています。こうした機会をさらに活かし、より多くの方々が道志村へ来て頂けるよう努力していきます。(大野航輔)



道志の湯の薪ボイラー

NPOについて

みなさん、最近よくNPOという言葉を知ったり、見かける事が多くありませんか？ ちょっとNPOに関する情報を整理してみました。

「NPOの意味は？」

NPOとはNon-Profit -Organizationの略称で、「非営利組織」という意味。民間組織で、利益（収入から費用を引いた分）を関係者に分配出来ないことが特徴です。

「会社と何が違うの？」

法人格を持つという意味では同等ですが、利益の分配方法が異なります。会社は利益を関係者（社員、株主等）に分配出来ますが、NPOは出来ません。NPOの事業で発生した利益は、NPOの事業に再投資します。

「お金を稼ぐのはだめなの？」

だめではありません。NPOも事業体として、収入を得て事業を運営していく必要があります。ただし、利益分配の方法が制限されています。

「ボランティア団体ではないの？」

ボランティア＝NPOではありません。ボランティアもNPOも社会へ奉仕する活動を行います。「ボランティア」は原則として無償で活動する人を指しますが、「NPO」は法律で定める活動を社会貢献として行う組織で、一定の枠のなかで営利活動が可能です。

さて、道志村にも2010年に産まれたばかりのNPOがあります。

今後このコラムでは、私たちとパートナーを組む、道志村で唯一のNPO団体である、「NPO法人道志・森づくりネットワーク」の活動を紹介します。

つつ、NPOの役割や状況についてもご紹介していきます。(大野航輔)

しょうゆづくりへの第一歩！

最近は大豆のことが、しょうゆのことが頭の8割を占めている私でした。あちこちでご縁があり、7月までに畑を3カ所お借りすることができました。これまで地主さんをはじめ、多くの方のお世話になりました。ありがとうございます。

畑での作業は肥料まき、耕耘、種まきと苗植えを終え、一段落しました。今は大豆の成長を楽しみに見守る日々です。

また、6月下旬にはしょうゆしぼりを体験させていただきました。しぼりたてのしょうゆの味は格別で、香ばしい匂いが辺りに漂いました。いずれは道志でつくった大豆と麦でしょうゆをしぼりたいと強く思いました。貴重な体験に感謝です。(しょうゆしぼり体験については、次号で詳しくご報告します。)(中野拓哉)

道志村での活動

6月に地域おこし協力隊のメンバーになり、まずは道志村をよく知るために色々なイベントに参加させていただき、道志村の地理、環境や色々な人とお話を聞かせていただいています。

また、畑をお借りしてきゅうり、ミニトマトなどの野菜づくりを始めました。初めての野菜づくりなので草刈りや、畑を耕すことに悪戦苦闘する毎日ですが、とても充実しています。畑で作業していると、声を掛けてくれる人もいますので、アドバイスをいただきながら、一所懸命に頑張っています。

います。

今後色々な活動をする中で、道の駅をもっと面白い場所に変えていきたいと妄想しています。道の駅に出荷されている農家の方々や、道の駅スタッフの方のお話も聞いてどんどん面白い企画を考えていけたらいいなと思っています。(井口陽介)



板橋の畑で草刈り。このあと、耕して大豆をまきました

山梨産の印伝を

先日、印伝の職人さんに印伝のつくりかたについてお話をうかがいました。学生のころ印伝をつくる試みをしていたので、その縁で職人さんとお話することが叶いました。

興味深かったのは、漆のお話です。印伝にはたくさん漆を使います。まぜものではない、本漆でないと印伝はつくれません。しかし、日本では漆を掻く(採る)職人さんが少なく日本産の漆はととても高価なため、中国産の安い漆を使わざるを得ないそうです。

山梨の伝統工芸品である印伝ですが、その材料は皮も漆も中国産です。山梨は気候的に漆の生産に適し、いっぽうでニホンジカが増えすぎて問題になっています。このような資源を利用して、すべて山梨産の印伝がつかれないものなのでしょうか。

道志村でも漆掻きの職人さんがいたと聞きます。村内で漆や鹿の皮にまつわる情報がありましたらぜひお寄せください。(香西恵)

「道志手帖」 創刊号



次号予告

「特集」

月夜野

『道志手帖』2号

2013年10月発行

月

夜野集落、分校跡地にある一本の桜。かなり高齢であることがその枝振りから伺える。

これまで迎えた数百回の春、桜の周りにはどんな風景や音、香りで満たされたのだろうか。

老人、大人、子ども達は何を語り、どのような気持ちで桜を眺めたのだろうか。桜と人の物語を探求したい。

文・撮影：大野航輔



道志村地域おこし協力隊：このマークは家紋をイメージしています。5枚の葉で5人の協力隊員をあらわしました。葉は、道志川を中心として葉脈のように沢の多い道志村のかたちをあらわしています。カラーは隊員それぞれのつなぎの色です。

発行日 2013年7月26日 発行元 道志村地域おこし協力隊 編集責任者：香西恵

〒402-0209 山梨県南都留郡道志村6181-5 道志村中央公民館2F

TEL：0554-52-2118 E-mail：kozai-kei@vil.doshi.yamanashi.jp